

# 体育理論領域における学習内容の批判的検討

山元 秀太<sup>\*1</sup>・坂本 一真<sup>\*1</sup>・則元 志郎

## A Critical Study of Learning Materials in the Theory of Physical Education

Shuta YAMAMOTO<sup>\*</sup>, Kazuma SAKAMOTO<sup>\*</sup>, Shiro NORIMOTO

(Received September 30, 2016)

### I 緒言

体育理論とは、中学校・高等学校学習指導要領により定められた学習内容の一領域である。中学校では運動やスポーツの合理的な実践や生涯にわたる豊かなスポーツライフを送る上で必要となる運動やスポーツに関する科学的知識等を中心に、高等学校では運動やスポーツの合理的、計画的な実践や生涯にわたる豊かなスポーツライフを送る上で必要となるスポーツに関する科学的知識等を中心に取り扱っており、保健体育科の目標でもある豊かなスポーツライフを継続する資質や能力の源となる重要な領域である。

しかし、山元ら<sup>1)</sup>が現段階の体育理論領域における授業実践の成果を把握するために行った調査では、高等学校における体育理論領域の学習内容についての理解の程度は低く、学習指導要領に記載がされていない体育・スポーツに関する内容の方が子どもたちの興味関心の程度が高かったことが報告されており、体育理論領域に関する意欲を高め、理解を深めさせるような授業を行っていく必要があるとともに、体育理論領域で何を教えなければならないのかを再認識し、体育理論領域の内容を再構成する余地があることが示唆された。また、野間<sup>2)</sup>によると体育理論について「研究者がそれぞれの立場によって、多方面から必要性が示されていたが、『体育理論』として何を学ばせるのかという視点での研究が十分にされてこなかった現状がある」と述べている。そして、学習指導要領の改訂の変遷を見ても、体育理論の内容は中高ともに変わり続けていることからわかるように「体育理論領域」の内容は未だ未開発であることが示唆される。

従って、本研究の目的は2008年改訂学習指導要領<sup>3) 4)</sup>における体育理論領域の学習内容に批判的検討を加え、体育理論領域の学習内容の課題について考察することとする。

### II 研究方法

中学及び高等学校の学習指導要領（保健体育編）および体育・スポーツの理論に関する文献を収集、比較、分析し、「各運動領域の知識」と「体育理論領域」の学習内容について検討した。また、「体育理論領域」の学習内容については「21世紀スポーツ大事典（2015）」<sup>4)</sup>の内容をスポーツ理論の大系とし、中学校及び高等学校の学習指導要領（保健体育編）の「体育理論領域」の学習内容と比較、分析を行った。

### III 結果及び考察

#### 1. 体育理論領域における学習内容の変遷

2008年改訂学習指導要領では教室などで、まとまりで学習することが効果的な内容を「体育理論領域」に、

---

\* 熊本大学大学院教育学研究科

それぞれの運動領域で学ぶことが効果的な内容は「各運動領域」に整理された。<sup>5)</sup> また、運動領域との関連で指導することが効果的な内容については各運動領域の「知識」で扱うこととしている。また、2008年改訂学習指導要領では運動を通して学習することが効果的として、特に自然科学分野の知識である1998年改訂中学習指導要領の「体はぐし・体力の意義と運動の効果」及び1999年改訂高等学校学習指導要領の「体はぐしの意義と体力の高め方」は、運動領域の「体づくり運動」の「知識」に移行され、「文化としてのスポーツの意義」や「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」などの人文・社会科学分野の知識が追加されることとなった。つまり、自然科学分野の知識に偏り、人文・社会科学分野の知識が欠落しているという1999年改訂学習指導要領における体育理論領域における批判が踏まえられ、現体育理論領域の内容は人文・社会科学分野の知識が加えられた内容になっている。

表1 体育理論領域における学習内容の変遷

中学校		高等学校	
1958年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動種目の特性と選択</li> <li>・練習の重要性と練習に関する諸条件</li> <li>・練習の方法</li> <li>・運動の身体的効果</li> <li>・運動の精神的効果</li> <li>・競技会</li> <li>・生活と運動によるレクリエーション</li> </ul>	1960年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達と運動</li> <li>・運動の練習</li> <li>・社会生活と体育</li> </ul>
1969年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校生徒の特性と運動</li> <li>・運動の特性と練習</li> <li>・運動の効果</li> <li>・体力の測定方法と結果の活用</li> <li>・現代の生活と運動</li> <li>・運動によるレクリエーションの現状</li> </ul>	1970年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動の特性と類型</li> <li>・生活と運動</li> </ul>
1977年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動と心身のはたらき</li> <li>・運動の練習と体力測定</li> </ul>	1978年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動の生理学的・心理学的・力学的特性</li> <li>・運動処方と練習法</li> <li>・現代社会と運動</li> </ul>
1988年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動と心身の働き</li> <li>・体力の測定と運動の練習</li> </ul>	1988年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力トレーニングの方法と内容</li> <li>・運動技能の構造と練習法</li> <li>・現代社会とスポーツ</li> </ul>
1998年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動の特性と学び方</li> <li>・体はぐし・体力の意義と運動の効果</li> </ul>	1999年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会の変化とスポーツ</li> <li>・運動技能の構造と運動の学び方</li> <li>・体はぐしの意義と体力の高め方</li> </ul>
2008年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動やスポーツの多様性</li> <li>・運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全</li> <li>・文化としてのスポーツの意義</li> </ul>	2009年改訂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴</li> <li>・運動やスポーツの効果的な学習の仕方</li> <li>・豊かなスポーツライフの設計の仕方</li> </ul>

しかし、従来自然科学分野の知識を中心とした体育理論領域は、各運動領域の「知識」に自然科学分野の知識の比重を移すことにより、体育理論領域に人文・社会科学分野の知識を加えた形となっているため、各運動に関する領域の「知識」と体育理論領域との両方を体育理論としてみたときに、自然科学分野の知識に偏っているという以前からの指摘は現学習指導要領にも当てはまる可能性がある。

以上のように、以前まで「体育理論領域」であった学習内容も「運動領域の知識」となっていることから、体育理論の学習内容を検討するうえで、2008年改訂学習指導要領「体育理論領域」の学習内容に加え、各運動に関する領域の「知識」の内容についても検討していく必要があるであろう。そして、体育理論領域についても分野別にみると自然科学、人文・社会科学の内容が盛り込まれてはいるが、体育理論の内容として不足している内容の検討は行う余地があると考えられる。

## 2. 「運動に関する領域における知識」の学習内容

体育の教科内容の領域は、A 体づくり運動・B 器械運動・C 陸上競技・D 水泳・E 球技・F 武道・G ダンス・H 体育理論というように運動領域では、スポーツ種目別の構成となっており、その各運動領域での知識は「体力の高め方」などをはじめとする自然科学分野の知識が主となっている。(表2) しかし、スポーツにはそのスポーツごとの歴史や文化的特性が存在し、その内容によっては、運動を通して学習した方が効果的な内容も存在する。

表3では、実際に各運動領域で実技を通して歴史や文化的特性などの、人文・社会科学分野の知識を学ぶことが可能であることを示す実践である。このような「ハード

ルの技術発展史」を学ぶ石谷(1989)<sup>6)</sup>、「クロールの歴史」を学ぶ牧野(1982)<sup>7)</sup>のような実践は運動に関する領域において扱える「知識」は自然科学分野にとどまらないことを示している。

表2 各運動領域に関する「知識」内容

	中学校	高等学校
体づくり運動	体づくり運動の意義と行い方	運動を継続する意義
	運動の計画の立て方	体の構造、運動の原則
	運動を継続する意義	体づくり運動の行い方
	運動の原則	体力の構成要素
	体の構造	実生活への取り入れ方
体づくり運動以外	健康・安全に気を配ること	健康・安全を確保すること
	特性や成り立ち	技術の名称や行い方
	技術の名称や行い方	体力の高め方
	関連して高まる体力等	運動観察の方法
	健康・安全を確保すること	課題解決の方法
	体力の高め方・運動観察の方法	競技会、発表会、試合の仕方

表3 実技を通して人文・社会科学の知識を学ばせる実践

「ハードルの技術発展史」を学ぶ授業(石谷・1989)	「クロールの歴史」を学ぶ授業(牧野・1982)
・実技学習単元のなかで技能習熟や技術認識と文化的認識の結合をめざした「技術発展史を教えるハードル走」	・「泳げてなんぼ」の水泳授業から脱却し、「これは面白いぞ」と子どもの知的好奇心を引き出すような水泳授業を求めた
・19世紀後半から始まった近代陸上競技のハードル走の技術発展史を中学生に教えた実践	・「速さの追求の技術発展史を追体験を含めて教える」という実践
・子どもたちは自分の技能習熟を人類の技術発展史のなかに位置付け、技術総観と歴史認識を結ぶ授業	・「クロール」に至るまでには前史がある「サイドストローク(横泳ぎ)」→「オーバーアームサイドストローク」→「トラジオンストローク」→「クロールストローク」と発展していったが、この技術変遷を「水の抵抗への挑戦の歴史」と捉え、この過程を子どもに追体験させた

## 3. 「体育理論領域」の学習内容

出原<sup>9)</sup>は、以前の学習指導要領について、「体育には文化的、社会科学的内容が欠落しているのである。運動学や生理学などの自然科学的内容だけが体育に関する知識として求められている。直接、技能習熟や身体運動や体力に結びつく実用主義的な知識で構成されているのである」と述べている。このように、体育理論領域の学習内容は、自然科学分野の知識を中心としたものであった。このような批判が踏まえられてか、2008年改訂学習指導要領における「体育理論領域」の学習内容では自然に加えて、人文・社会科学の内容が盛り込まれている。

しかし、「体育理論領域」の学習内容に人文・社会科学の内容が盛り込まれたのは戦後の学習指導要領以来であり、2008年改訂学習指導要領における「体育理論領域」が十分な学習内容であるかは、疑問が残るところであろう。そこで以下より、スポーツ理論の大系のうち2008年改訂学習指導要領における「体育理論領域」の学習内容ではない内容を検討し、「体育理論領域」の内容的不足を指摘していく。

### 1) スポーツの理論体系

体育授業における「知」の位置づけについて岡出<sup>10)</sup>は、「教科内容の体系やその学習可能性、それを可能にする手続きを提示することが求められる。よってスポーツ科学の研究成果は、教科内容の体系を検討する際の一つの根拠となる。しかし、スポーツ科学は人に教えるために成果が体系化されてきたわけではない」と述べていることから、スポーツ科学の研究成果は体育理論の内容体系を検討する根拠となり得ること、そして、スポーツ科

学は人に教えるために成果が体系化されてきたわけではないためその中から体育の教科内容として教育的価値を見出すことが必要であると考えられる。

そこで、本研究ではスポーツ科学は日々進化してくことを踏まえ、最も新しいスポーツ事典である「21世紀スポーツ大事典」をスポーツの理論大系として取り扱う。また、他の文献の目次がスポーツ競技別に構成されているのに対し、「21世紀スポーツ大事典」ではスポーツの知識の分野別の目次構成になっていることも本文献の選定理由となる。

また、「21世紀スポーツ大事典」には、スポーツと概念からスポーツ競技までの26項目についての理論項目が記載されている。

表4 21世紀スポーツ大事典の項目

01 スポーツと概念	02 スポーツと政策	03 スポーツと法	04 スポーツとジェンダー
05 スポーツと経済	06 スポーツとアカデミズム	07 スポーツと健康	08 スポーツと身体文化
09 スポーツと医科学	10 スポーツとメンタリティ	11 スポーツと組織	12 スポーツと宗教
13 スポーツと技術・戦術	14 スポーツと学校体育	15 スポーツと歴史	16 スポーツと民族
17 スポーツと思想	18 オリンピック	19 スポーツとルール	20 スポーツとメディア
21 スポーツと倫理	22 スポーツと芸術	23 スポーツと科学技術	24 スポーツと人種
25 スポーツと障がい者	26 スポーツ競技		

## 2) 学習内容の検討

スポーツの理論体系を「学習指導要領に記載がある内容」と「学習指導要領に記載がない内容」に分類した。「学習指導要領に記載がある内容」は、スポーツ理論の大系から体育科における教育的価値が見いだされた内容であるが、「学習指導要領に記載がない内容」については教育的価値が見いだされていない内容となる。

以下より、本研究では「学習指導要領に記載がない内容」に教育的価値を示すことで体育理論領域に不足している内容がある可能性を示していく。本来ならば、「学習指導要領に記載がない内容」全てにおいて教育的価値を検討することが望ましいが、本研究においては、収集した文献の中から、先行研究が多く報告されている「スポーツと政策」及び「スポーツと学校体育」に絞り、それらの教育的価値を示していく。

表5 スポーツ理論体系の分類

学習指導要領記載	有	概念	メンタリティ	技術・戦術	ルール	医科学
		法	経済	歴史	民族	オリンピック
		障がい者	メディア	倫理	人種	健康
	無	政策	学校体育	身体文化	芸術	ジェンダー
		科学技術	思想	アカデミズム	宗教	組織

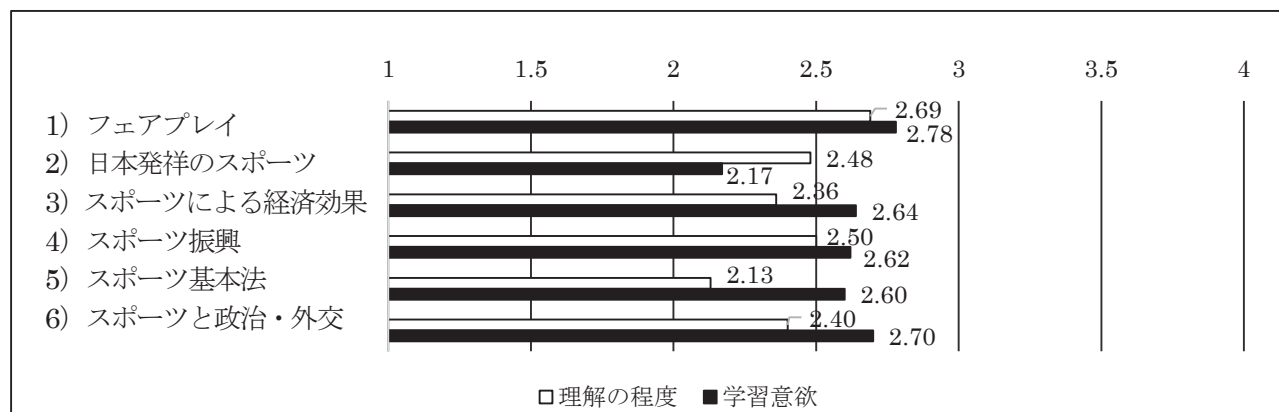
### ①スポーツと政策

野間<sup>11)</sup>は、体育理論領域で学ぶべき内容としてスポーツと政治の学習の必要性を述べており、さらに山元ら<sup>12)</sup>の体育理論の内容における理解度と興味関心の程度を調査した研究によるとスポーツと政治・外交への興味関心は平均より高いことが示されている。(図1)

また、岡出<sup>9)</sup>によると「アメリカにおけるスポーツに関する教育は科学的知見を基盤に体育の教科内容を構築する立場にあり、体育授業で学習が求められる基礎知識を、それぞれの分野の最新の情報を踏まえつつ、生徒の必要性や関心、認識過程を踏まえることに重きを置いているとしている」としている。つまり、教育的価値を考慮した上での生徒の必要性や関心は、スポーツ大系から体育理論の内容として選定する際の検討指針の一つとなりえるということがいえるであろう。

また、加藤<sup>13)</sup>が「現代社会におけるスポーツと政治の問題については、オリンピックをはじめとする国際競技会の隆盛によって、より多くの関心を集め、今まで以上に盛んに議論されるようになってきた」と述べているように、今日において、2020年東京オリンピックの開催や選挙権18歳の引き下げなど政治、政策についての子どもたちにとってもより学ぶべき必要感のある内容となっていると考えられる。




 図1 スポーツと政治も含む体育理論内容の理解の程度及び学習意欲 (山元：2015<sup>1)</sup> から引用)

## ②スポーツと学校体育

表6 戦後の体育理論領域の学習内容 (高等学校)

1951 年	1. 体育史 体育の起源, 古代東洋諸国の体育, 欧州の体育, 日本の体育 2. 体育の目標 スポーツマンシップ, アマチュアとプロフェッショナル 3. レクリエーション 余暇の意義, 欧州・日本の余暇, 欧米・日本の社会体育, 学生のスポーツとレクリエーション 4. 家庭体育 家庭体育の意義・内容・方法・現状, 欧米の家庭体育 5. 運動衛生 運動と年齢・性・体質の関係, 疾病・外傷・日光・空気, 栄養・疲労と栄養, 各運動と衛星的考察 6. 国際競技 近代・冬季オリンピック, デヴィスカップ選手権, ウィンブルドン庭球大会, アジア競技会
1955 年	1. 発達と体育 運動の心身の発達に及ぼす影響, 高等学校における生活と体育 2. 運動の学習法 運動種目の選択, 合理的な運動学習法, 運動効果の評価 3. 生活と体育 近代までの体育, 現代の生活と体育

出原<sup>14)</sup>は、「戦後民主教育の時代の日本の中学生, 高校生はすでにスポーツ文化の発展論を学んでいた. スポーツ文化の主体者として, この豊かな文化の継承・発展の理論を学ぼうとしていた」と述べている. 表6に示してある1951年学習指導要領では、「体育史」として, 1955年学習指導要領では、「発達と体育」「生活と体育」として, 「学校体育」の内容について扱われていることが分かる. しかし, それ以降の学習指導要領改訂における体育理論の内容としては扱われていない.

出原<sup>14)</sup>は, 「戦後日本の教育政策は一貫して体育理論領域を削減してきた. 体育理論の内容は学習指導要領の改訂のたび毎に減少され, 内容の質も貧弱なものになっていった.」と述べている. また, 中西<sup>15)</sup>は「体育・スポーツに関する歴史的認識内容が1960年から, 発達の観点から1970年から削除されていることから分かるようにその内容は大幅に, しかもプレイ場面に時間的にも空間的にも直結するものに限定する方向で削除されてきた」と述べている.

1960年の学習指導要領改訂以降, 体育理論領域の学習内容において「技能習熟」に関連した自然科学分野の知識が大半を占めるようになった背景には学習指導要領改訂において技能習熟・体力向上重視の体育を目指していたことが挙げられる. しかし, 2008年改訂学習指導要領では豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとして技能習熟・体力向上のみならず, スポーツを歴史的, 社会的な文化として捉える力が求められている.

以上より, 長い学習指導要領改訂において人文・社会科学分野の知識を体育理論の内容とした改訂が少ないなか, 戦後学習指導要領を参考にすることがスポーツ大系から体育理論の内容として選定する際の検討指針の一つ

となりえると考えるならば,「スポーツと学校体育」は体育理論の内容となる可能性があるであろう.

#### IV 結論

- ①「運動領域の知識」で扱う内容にも人文・社会科学分野の知識を取り入れる必要がある.
- ②(スポーツ理論大系にあるうち)現行学習指導要領の体育理論領域にない内容も再検討する余地がある.

#### V 引用・参考文献

- 1) 山元秀太・坂本一真・蓑田修治・山田禎郎・則元志郎(2015)「体育理論における課題の検討」熊本大学教育学部紀要 64号 p247-252
- 2) 野間基子(2011)「高等学校における『体育理論』の内容に関する批判的検討」日本体育学会大会予稿集 62 巻 p265
- 3) 文部科学省(2008)「中学校学習指導要領解説(保健体育編・体育編)」東山書房
- 4) 文部科学省(2009)「高等学校学習指導要領解説(保健体育編・体育編)」東山書房
- 5) 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則(2015)「21 世紀スポーツ大事典」大修館書店
- 6) 文部科学省(2011)「新学習指導要領に基づく中学校・高等学校における保健体育科リーフレット」
- 7) 石谷俊彦(1983)「今後の課題—『技術発展史学習』の実践から」『教育実践事典』第 2 巻 3 刷, 労働旬報社 p430-32 (初版 1982)
- 8) 牧野満(2013)「水泳の授業で何を教えるか—ドル平をベースとした指導の積み重ねから—」『たのしい体育・スポーツ』第 32 巻第 6 号 p46-51
- 9) 出原泰明(1995)「『教室でやる体育の授業』のひとつの試み—『ボールの授業』の実践モデルの意義—」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』No5p140
- 10) 岡出美則(2009)「体育の『知』をどこで, どう教えればよいのか」『体育科教育』第 57 巻 10 号大修館書店 p20-23
- 11) 同掲書 2) p265
- 12) 同掲書 1) p249-250
- 13) 加藤大仁(2003)「政治, 権力とスポーツ—『スポーツと政治』研究のための一考察—」『慶應義塾大学体育研究所紀要』p19-26
- 14) 同掲書 10) p150
- 15) 中西匠(1988)「体育科教育における人格形成論Ⅱ」『教育学研究紀要』中国四国教育学会誌 33 巻, 2 部, p385